

口演 | その他

■ 2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 ■ 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:00 ~ 13:08

[28-O-Z001-01]

ロータスケアセンター解体祭

まちと繋がるはじまりの物語

千葉県 ○長明 達也 (ロータスケアセンター)

13:08 ~ 13:16

[28-O-Z001-02]

当施設のeスポーツ導入取り組みと利用者の機能的変化

宮城県 ○安部 卓 (介護老人保健施設グレイスガーデン)

13:16 ~ 13:24

[28-O-Z001-03]

腰痛予防・改善を目指して

正しくコルセットを使用して腰痛の予防・改善を試みる

長野県 ○滝澤 加菜 (社会福祉法人サン・ビジョン介護老人保健施設グレイスフル下諏訪)

13:24 ~ 13:32

[28-O-Z001-04]

選ばれる施設へ！戦略的なブランディング活動に挑戦

大阪府 ○福井 真紀¹, 金田 ゆき¹, 山住 恵¹, 布澤 良太¹, 中本 幸美¹, 岩佐 郁紀子² (1.松下介護老人保健施設はーとぴあ, 2.指定居宅介護支援事業所はーとぴあ)

13:32 ~ 13:40

[28-O-Z001-05]

「摂食嚥下」分野実地研修の3年間を振り返る

～受講者の声からプログラムの意義について～

栃木県 ○菊池 要子¹, 若林 麻里¹, 佐川 敬一朗² (1.介護老人保健施設ほほえみ, 2.佐川歯科医院)

13:40 ~ 13:48

[28-O-Z001-06]

当施設における多様な特性の方の施設運営業務参画

千葉県 ○治部 拓也, 深沢 彦史 (介護老人保健施設 市川ゆうゆう)

13:48 ~ 13:56

[28-O-Z001-07]

<腰は大事>

腰痛体操で予防改善

東京都 ○川上 典子 (介護老人保健施設花水木)

口演 | その他

📅 2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 🏢 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:00 ~ 13:08

[28-O-Z001-01] ロータスケアセンター解体祭

まちと繋がるはじまりの物語

千葉県 ○長明 達也 (ロータスケアセンター)

【はじめに】

当施設は平成10年に開設し、今年で27年目となる。今後の多様化する利用者ニーズへの対応や職員の働きやすさ等を加味した長期的な視点での新築移転により、旧施設の解体が決まった。介護老人保健施設（以下老健）は、地域包括システムの中核を担う施設として高齢者在宅復帰と在宅療養を支援する役割を担っている。旧施設解体を地域とのつながりが持てるイベントとし、過去から未来へ地域の方々と一緒に想いを繋ぐ機会として、協力病院・解体業者・地域の方々の協力のもと、解体祭を開催した。老健と地域とのかかわりとロータスの未来をここに報告する。

【目的】

解体祭とは、これまでまちを見守ってきた建物に最後の感謝を伝えることや、まちのこれからの未来を多くの方にイメージして頂くことを目的としたイベントである。今回の解体祭は、2024年11月より解体が決定している旧施設で、これまでお世話になった建物への感謝や、より地域に根ざした老健の第一歩として、地域の方々と共に「ロータスケアセンターの新たな幕開け」を祝う2日間をコンセプトとした。

【準備】

7月～ コンセプト、方針の決定

8月～ 企画内容の決定（レイアウト、出店依頼、行政申請）

9月～ 告知、出店、備品手配と作成

【実施日時】

令和6年10月26日（土）15:00～19:00、27日（日）11:00～16:00

【イベント内容】

- 1) コロナ禍明け4年ぶりロータス祭りでの盆踊り復活
- 2) 解体される旧施設を彩るらくがき企画
- 3) 普段は許されない壁や床・窓ガラスに、大人や子供も自由に建物を彩る。
- 4) 施設の歴史を振り返る年表展示。施設の歴史と照らし合わせながら、来場の方の歴史も一緒に振り返る年表づくり
- 5) 旧施設をバックにショベルカーと記念撮影が可能なフォトブース設置
- 6) 解体の廃材が新たなコンクリートになるまでの「再生工程」に触れる技術の展示。
- 7) 船橋のミライを想像し、まちの方々や保育園、利用者に描いて頂いた絵画展示会。
- 8) 新旧施設の変成を楽しめる新築お披露目会
- 9) ロータスケアセンター/協力病院による健康体操や合唱、講演・カンファレンス・ゲームコーナーなどブース出展。
- 10) 地域のスポーツチームとコラボ企画
- 11) まちのキッチンカー出店
- 12) 会場全体を使った謎解き
- 13) ロータス広報キャラクター 命名アンケート

【実施結果】

来場者数 延べ1000人(2日間合計)

【開催後の来場者アンケート】

・同じ地域でありながら、知っているようで知らなかった施設の歴史やどのようなことやっているのかを改めて

知ることができ、大変興味深い機会でした。

・建物自体は無くなってしまいが、今日の記憶は忘れられない思い出となり、新たな施設での機会が楽しみになりました。

・是非、これからも施設と地域で協力しながら何かイベントとか開催してほしいです。

・子どもたちに普段できない大胆な遊ばせ方を、家の近くでできたことが不思議な体験でした。

【まとめ】

今回2日間の解体祭を通じて、多くの経験を得て、これからのロータスとしての未来を考える機会となった。延べ1000人の来場者には、現在利用中の方だけでなく、開所から27年間でロータスケアセンターを利用されていた方やその家族、元職員等の参加もあった。単発での利用だけでなく、今回の参加で「お久しぶりです」「以前、親がお世話になっていました」など声をかけていただくこともあった。らくがき企画では至るところに「ロータスケアセンターありがとう」など感謝の言葉が書かれていた。現在、ロータスへの利用相談で、二世帯に渡っての相談も多くなっている。また、ロータスには認可保育園があり、卒園生や近隣の小学生などの参加数も多かった。昨今、人材確保が難しくなっているが、子ども達に老健で働く職業を認知してもらうことで、将来を支える世代が「こういう職場で働きたいな」と記憶に残るイベントになるよう子ども達が楽しめるブースも設置した。

普段は利用される方やその家族が出入りすることはあるも、一般の方が出入りする機会は少ない。地域で介護など困っている方で相談先が分からない、どうして良いか分からない方が身近に感じてもらえる施設であると考え。今回の解体祭では、職員も参加者と一緒に楽しんで盛り上げられる企画も多くあった。同じ視点で一緒に参加することで、職員と参加者の垣根なく距離も短くなり、実際にアンケートでも「職員さんがやさしくかった」「一緒に盆踊りやゲームができて楽しかった」などの感想もいただいた。また、オリジナルの広報キャラクター作成も子ども達など幅広い年齢層の方にも好評な意見もいただき、覚えてもらうツールの一つとなったのではないかと考える。

各医療機関や事業所、地域の方から「解体祭に参加しました」「すごく良かったです」「記事を観ました」など多くの声をいただいた。これまでも地域での相談会や健康体操、認知症カフェや居宅ケアマネ交流会など毎年実施している。解体祭では今までより広い地域の方へポスターやSMSの利用した告知と参加があった。解体祭後では実際に相談いただく地域の範囲や直接家族からの件数も増えている。今後は秋祭りとして、お祭りを引き継いで地域の方にも参加や協力いただき、地域とのつながりのイベントとしたい。また、R6.11月から旧施設の解体が開始となりR7.4月に無事解体工事が終了。今後は芝グラウンドにして保育園の運動場やバーベキューなどもでき、地域の福祉避難所としても活用できるよう準備を進めている（R7.7月時点）。地域包括ケアシステムの中核を担う施設で超強化型施設として今後もロータスケアセンターが先頭に立って、様々な取り組みをしていきたい。そのためには先ず、職員が「ワクワク・イキイキ・ニコニコ」働けること。そして、利用される方が安心でき、地域の拠り所となる未来あるロータスケアセンターを共に創り上げていきたい。

口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:08 ~ 13:16

[28-O-Z001-02] 当施設のeスポーツ導入取り組みと利用者の機能的変化

宮城県 ○安部 卓 (介護老人保健施設グレイスガーデン)

【はじめに】 令和7年4月、当施設ではeスポーツの一種である太鼓ゲームを、個別リハビリテーションやレクリエーションに取り入れた。従来、eスポーツは若年層を中心とした文化と認識されていたが、少子高齢化が進行する中で、高齢者によるeスポーツの活用にも注目が集まっている。群馬県では、全国の自治体で唯一eスポーツと名のつく専門部署「eスポーツ・クリエイティブ推進課」を2020年に設置している。また、2024ねんりんピックではeスポーツが正式種目となり、高齢者にとってeスポーツは、身体、認知機能の維持・向上、社会的孤立の予防、心理的ストレスの軽減、さらには生活の中に楽しみや意欲を見出す手段としても有用であると考えられる。本研究では、eスポーツの一種である太鼓ゲームを導入し、参加者の身体的・認知的・心理的変化について検証した。さらに、取り組みを通じて明らかになった効果と課題、今後の展望について考察し、超高齢社会におけるeスポーツの役割を探ることを目的とする。【当施設での取り組み】数あるeスポーツの中でも、太鼓という日本文化に馴染みのある題材を選択した背景には、参加者の心理的ハードルを下げる意図がある。加えて、目で譜面を追い、耳で音楽を聞き、パチで太鼓を叩く動作は、視覚・聴覚・運動機能を同時に刺激するため、良いリハビリ効果が期待できると考えた。令和7年6月には、日本アクティビティ協会の「健康ゲーム指導士養成講座」を職員5名が受講・取得し、より専門的な知識と技術に基づいた活動運営体制を整備した。また、当施設の取り組みは市の広報紙や地元新聞でも紹介され、地域社会からも関心を集めている。【対象・方法】対象は、当施設の入所者15名およびデイケア利用者4名の計19名（男性3名・女性16名、平均年齢85.8歳）とした。入所者には個別リハビリの時間に、デイケア利用者にはレクリエーションの時間に太鼓ゲームを実施した。実施頻度は、入所者が週4回（1日2回×週2回）、デイケア利用者は週1回とした。導入当初、対象者や職員の中には「ゲームは子供のもの」「遊びである」といった否定的意見や、ルールへの理解が困難な方もいた。これに対し、セラピストが隣で模範動作を行い、「ドン」「カッ」と声かけをすることで支援を行った。また、太鼓に色分けテープを貼付し、環境調整を行った。また、1回実施ごとにスコア、連打、タイミングの質を見る良、可、不可、可以上を継続して叩いた回数のコンボの記録を取った。評価項目は以下を設定した：肩関節屈曲可動域（ROM）、握力、認知機能（MMSE）、注意・処理速度（Trail Making Test A）、心理的ストレス（K6）、反応速度評価、慢性疼痛（NRS）。初期評価は令和7年4月14日~5月8日、最終評価は同年6月16日~6月25日に実施した。【結果】各評価項目の結果は以下のとおりである。肩関節屈曲ROM：向上10名、維持7名、低下2名握力：向上3名、維持8名、低下8名MMSE：向上16名、維持2名、低下1名TMT（A）：向上9名、維持0名、低下10名K6：向上10名、維持4名、低下5名反応速度：向上13名、維持0名、低下6名慢性疼痛（NRS）：向上6名、維持13名、低下0名スコア：向上15名、低下4名連：向上15名、低下4名良：向上15名、低下4名不可：向上13名、低下6名コンボ：向上16名、低下3名認知機能（MMSE）では18名が維持・向上し、反応速度でも13名で向上が確認された。肩関節可動域や慢性疼痛（NRS）でも多くの参加者で良好な結果が見られた。一方で、TMT-Aでは10名が低下していた。【考察】eスポーツの導入により、多くの評価項目で向上が見られ、特に認知機能（MMSE）において18名が維持・向上したことは注目に値する。eスポーツを実施することで前頭葉への脳血流が促進するとの報告があり、認知機能向上につながったことが考えられ

る。加えて、実施ごとのスコア・連打数・良判定・不可判定・コンボ数において、すべての項目で約8割の参加者が向上した点は、継続的に集中して取り組む力が高まったと考えられる。これらの結果は、太鼓ゲームが「ただのレクリエーション」ではなく、参加者が達成感を持ちながら反復的に努力する要素を持っていることを示している。身体機能面でも、太鼓を叩く動作が肩関節可動域の改善や反応速度の向上に寄与していると考えられる。精神面では、K6の改善や「太鼓面白い」「良い運動になる」といった肯定的な反応の増加が、eスポーツが楽しみや意欲向上の一助になり得ることを示した。一方で、TMT-Aでは10名が低下しており、注意力や処理速度に関する改善は短期間の介入では十分な効果が得られにくいことが示された。加えて、測定時の体調や理解度、評価環境による影響も考えられ、これらを踏まえた上で、長期的な介入の必要性が示唆された。【まとめ】本研究を通じ、eスポーツの導入は、認知機能の維持・向上、身体機能（特に上肢可動域・反応速度）の改善、心理的ストレス軽減と意欲向上、といった多面的な効果を高齢者にもたらす可能性が確認された。スコアやパフォーマンス面でも向上が見られ、単なる娯楽の枠を超えたりハビリ的意義を持つことが示唆された。特に、初期には抵抗感を持っていた高齢者が「またやりたい」「楽しかった」と感じるまでに変化したことは、eスポーツが高齢者の精神的活性化や社会的交流のきっかけとなり得ることを示す好例である。本研究は、eスポーツが高齢者の生活の中に新たな価値を提供し、リハビリや福祉活動の新たな可能性を切り開くものであることを示唆しており、今後の介護老人保健施設におけるeスポーツ活用の発展に向けての一助となることを期待したい。参考文献※日本アクティビティ協会

口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:16 ~ 13:24

[28-O-Z001-03] 腰痛予防・改善を目指して

正しくコルセットを使用して腰痛の予防・改善を試みる

長野県 ○滝澤 加菜 (社会福祉法人サン・ビジョン介護老人保健施設グレイスフル下諏訪)

【はじめに】当法人は一般社団法人全国ノーリフティング推進協会の会員であり、腰痛の予防のために入職時に軟性仙椎装具（以下コルセット）が支給されている。腰痛に関するアンケートなど実施するも一定量の職員からは腰痛や腰部の違和感についての訴えがある。そもそもコルセットを装着すると腹圧の向上・仙椎の可動性の制限をすることで腰痛を予防・軽減する効果があると言われている。そこでコルセットを正しく装着できているのか、また意味合いを理解して装着できているのか疑問が生じ、装着方法を確認したところ個人差があることに気づいた。正しく装着することで腰痛の軽減につながるのではないかと仮説をもとに、取り組みを実施。疼痛のスケール上での数値の改善が得られたため、報告させていただく。【対象・方法】対象：1年以上の勤続がある介護職員男女18歳～45歳（20名）方法：2025年3月31日を締め切りのNRSによる疼痛のアンケートを実施。その後順次コルセットの正しい装着方法（装着をする位置・ベルトの締め方・装着した時の腹部の圧迫感の目安）を指導。正しい装着方法を理解した上で今まで通りの通常業務を2ヶ月間実施。その後2025年5月31日付で3月同様のアンケートを実施。【結果】指導実施前：NRS Mean：2.7 Median：2.5 握力（末梢の筋発揮として）：Mean 24.58指導実施2カ月後：NRS Mean：1.85 Median：1 握力（末梢の筋発揮として）：Mean 27.65【考察】 傷害や疾病などを取り除いた腰痛の原因として多いと言われているのは1.最長筋・腸肋筋・腰方形筋・広背筋（背中の中大きな筋肉）の筋硬結2.1の筋群の栄養血管圧迫による阻血3.精神的要因と言われている。筋硬結が起こる原因として、腹圧の低下が招く不良姿勢（反り腰や円背など）の影響により良姿勢時と比べて必要以上に背中の中筋肉が使用されてしまう。または必要以上に延ばされてしまうことで筋硬結が起こる。阻血に関しては上記に書いた過剰収縮や伸張ストレスにより筋が硬結してしまえば栄養血管である、絞扼を受ける疼痛の誘発物質の放出されることで疼痛が誘発される。精神的要因としてはストレスなどの身体化による姿勢の崩れ、血流不足などによる腰痛があることを厚生労働省の調査でも原因として挙がっている。コルセットを正しく装着することによる大きなメリットとして腹圧の上昇が期待できる。腹圧が上昇することで脊柱の正しい姿勢での固定ができる。正しい姿勢を取れるようになることで背中の中筋肉を必要以上に使用することがなくなる。必要以上に使用しなければ阻血状態にも陥らないという正のスパイラルを作り上げることで腰痛の原因となる1と2にアプローチすることができた。3の精神的要因に関しては普段からの介助動作や利用者様への不安などにより身体のこわばりが生まれることで疼痛を引き起こす要因になるとも言われている。今回握力でも示した通り腹圧が上昇することにより末梢筋群の筋発揮が上昇しているという事実を各サンプルは理解をしている。コルセットを正しく着用出来ているという安心感も1つ不安材料を打ち消す要因にもなりえている可能性がある。【まとめ】 厚生労働省の調査では介護職員が働く保健衛生業界内での業務上の疾病の中の92%が腰痛となっており、現在働かれている介護職員の46%は腰痛を原因に離職を考えたことがあるとのこと。当法人でも福利厚生の一環として腰痛ベルト（コルセット）の配布を行っているが、つけ方を正しく教わる機会はない。私自身もそうであるがコルセットを渡され、つけるといわれたら装着することは可能であるが、正しく装着できているかどうかは疑問である。今回コルセットの装着位置が人により違うことに気づき正しい装着方法を調べるきっかけとなった。私自身も正しく装着してみた時の腹圧のかけ方をこれはいつもと違うと感じた。昨今の介護現場では新しい福祉機器や介護ロボットなども普及しており、当法人もノーリフトポリシーにも力を入れている。しかしながら現状として当施設での評価サンプリング

となった20名の職員のうち腰痛が全くないと答えた職員はわずかに5名だけである。新しく機械を取り入れることも重要であるが、自分自身の体を守るために今あるものを正しく使用し、正しく体を使うことが重要なのだと感じた。今後も1人での多くの職員の体を守るように正しいコルセットの装着方法の指導を実施していく。

口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:24 ~ 13:32

[28-O-Z001-04] 選ばれる施設へ！戦略的なブランディング活動に挑戦

大阪府 ○福井 真紀¹, 金田 ゆき¹, 山住 恵¹, 布澤 良太¹, 中本 幸美¹, 岩佐 郁紀子² (1.松下介護老人保健施設はーとぴあ, 2.指定居宅介護支援事業所はーとぴあ)

【はじめに】

法人全体のブランド価値向上の取り組みを起点として、施設内でブランディングプロジェクトを立ち上げ広報の強化を図ることになった。以前より広報活動は行っていたが、自分たちの取り組みや特徴がご利用者・ご家族をはじめ地域の方や事業所等に十分伝わっていないこと、広報業務も長年見直しされていないという課題があった。そこで、新たなブランディングの取り組みでは、当施設の使命や築いてきたブランド価値を分かりやすく伝え、施設のファンを増やしご利用者の拡大を図るとともに、広報業務の仕組み作りやペーパーレス化等の業務改善にも繋げることができたので報告する。

【取組み内容】

A: コンテンツ作成

■ホームページの刷新

- ・事前にホームページで良く閲覧されている内容を調査し、刷新時の参考にした。
- ・職員から公募した施設のキャッチコピー、「リハビリ、介護、医療が一つになり、笑顔・HAPPYな毎日を」を行動指針として明確化した。
- ・施設の想いや強みを整理し「お伝えしたい7つの特徴」にまとめて分かりやすくTOPページで紹介した。
- ・パソコン以外から情報を見るニーズが増えておりスマートフォンを考慮し、必要以上にスクロールを繰り返さないようページの構成を工夫した。
- ・画面デザインは業者まかせではなく、自然豊かな環境を表現した温かみのある色味や文字、クリックボタン等のデザイン細部に至るまですべて職員で考えた。
- ・パンフレットや利用に関する書類をホームページから閲覧・ダウンロードができるようにし、ご利用者の利便性向上と職員の対応時間や郵送・FAX費用の削減に繋がった。
- ・登場人物は施設の職員やご利用者の同意を取り参加していただいた。

■施設が分かる動画の作成

- ・施設を分かりやすく紹介するため、各サービス内容や実績、職員紹介など13本の動画を職員で作成した。
- ・サービスを検討されている方やケアマネジャー等に広く伝えるため、ホームページや併設病院で動画を放映した。また、施設受付にデジタルサイネージ(大型モニター)を新設し、来客された方の待ち時間に見ていただけるようにした。

■電子パンフレットの作成

- ・広報の横展開として、ホームページで使用した素材を、持ち出し用のタブレットやスマートフォンに取り込み、訪問先などでも視覚的に分かりやすく施設を説明できるようにした。

■施設公式キャラクター「はーとぴー」の制作

- ・施設内で公募し、職員がオリジナルキャラクターのデザインとネーミングを考案し、商標登録した。
- ・ホームページや広報物等だけでなく、職員にも自由に使えるように素材を提供し、社内資料

や社外資料などあらゆる場面で使用をして目に触れる機会を増やし、キャラクターイコール「老健はーとぴあ」と認知していただけるよう工夫した。

B: 広報の体制作り

■広報に係る業務の洗い出しと改善・業務内容が重複していた社内の「ブランディング・地域・広報」の役割を整理し、無駄を削減した。

・活動内容の発信方法を整理し、地域活動前に「ホームページのお知らせページへ掲載」、開催後「ブログページへ掲載」する流れを作り、社外や社内に広く活動内容が分かるようにした。

■地域活動・広報に関わる活動を併設病院の広報と連携し体制を強化

・併設病院は認知度が高いため、病院主催の市民公開講座やイベント等の広報の際「いざという時に連携できる施設」としてアピールする仕組みを整えた。

・併設病院のイベントでは、施設の強みである「認知症ケア」をテーマにしたコーナを設置し、施設を知っていただく機会を増やした。

■法人全体の情報を集約した広報誌に刷新

・施設単独の広報誌から併設病院の広報誌へ統合させ地域の病院等、広報先を拡大させた。

【結果】

・広報先の増加や広報元になるコンテンツが充実し、広報の幅が広がった。

・ホームページの閲覧数が刷新前と比較して2.18倍になった。

・ホームページは、スマートフォン対応することで見やすくなり、営業ツールとして活用できるようになった。

・ホームページの刷新をきっかけに、改めてケアマネジャーへ「ホームページの案内」を基にした営業活動にて施設の特徴をアピールができた。「見やすく（分かり易く）、暖かい雰囲気がかわいい」と良い評判も得られた

・資料や動画も職員が作成しているため、メンテナンスが簡単で速やかに実施できる。・問い合わせ件数が活動前の2021年に比べ2024年度は20%増加した。

・新たに作成したコンテンツは、タブレットやスマートフォンにも横展開し営業ツールとして活用することで口頭で説明をする時間を、動画や写真で伝えることができ説明の時間短縮で年間50時間削減となり業務改善に繋がった。

【考察】

・ホームページの閲覧数が上がった要因は、スマートフォン対応をしたことや検索エンジンで上位に表示されるようホームページの原稿作成時にSEO対策を行ったことが有用であったと考えられた。

・企画・デザイン・掲載内容等、職員が裁量を任せられたことで、自分たちの思いを形にでき、施設の強みとして伝えたいことを魅力的に発信することができたと考えられた。

・施設を知ってもらう機会が増えたのは、老健単体ではなく併設病院と連携して地域活動をしたことで宣伝対象者が増えたためと考えられた。また部門を越えて活動することで法人全体のブランド価値を向上させることが重要であると考えられた。

・持ち出し用のタブレット・スマートフォンやサイネージにも横展開ができ広報のツールが増え、広報の体制づくりが強化されたと考えられた。

・口頭による説明を動画に変更した結果、ペーパーレス化や時間短縮の業務改善に繋げることができたと考えられた。

【結語】 広報活動では自分達らしいブランド価値を効果的に伝え施設のファンを増やすことが重要である。今後は外部だけでなく職員への発信にも力を入れ、職員一人ひとりが自施設のファンになる取り組みも強化したい。

口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:32 ~ 13:40

**[28-O-Z001-05] 「摂食嚥下」分野実地研修の3年間を振り返る
～受講者の声からプログラムの意義について～**栃木県 ○菊池 要子¹, 若林 麻里¹, 佐川 敬一朗² (1.介護老人保健施設ほほえみ, 2.佐川歯科医院)**【はじめに】**

当施設は2021年より摂食機能療法専門歯科医師の協力の下、口腔衛生管理や摂食嚥下機能評価に基づく食支援を行っている。これは利用者の安全で十分な食事摂取継続と最期まで食べる楽しさを支えることで、QOLの維持・向上を目標としている。

実地研修とは、全国老人保健施設協会が承認した専門分野について特色ある取り組みを行っている施設（1回の承認期間3年）で、会員施設職員が各分野の専門実技を習得することを目的としている。当施設は摂食嚥下分野の認可を受け、2022年度から年に2回研修を実施している。今回は、受講者の声をもとに実施開始からの3年間を振り返り、研修の意義を考察した。

【方法】

未開催の2022年度後期を除く各回受講者全43名を対象に終了時行った、無記名式の質問紙調査及び、2022年度から2024年度の受講施設対象のGoogleフォームを利用したWeb上無記名式の質問調査。対象施設に調査協力依頼文とアンケートアクセス用QRコードを郵送し、各回別に回答を依頼した。同一回に複数の受講者がいる場合は代表者1名を回答者とした。各自由記載部分よりキーワードを抽出した。但し、2024年度後期はデータ欠損が生じたため除外した。

Webアンケート実施期間は2025年7月3日から9日。21件中13件からの回答を得た。

倫理的配慮として、質問紙は無記名であり、対象者へ研究の目的等、不参加であっても不利益がないこと、得られた情報は個人が特定されないように配慮し本研究以外には使用しないことを書面で説明した。自由回答とし、回答をもって同意を得ることを記載した。また、医療法人桃李会倫理委員会の承認を得た。本演題発表に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果】

研修参加総数は21施設で、終了後アンケートは4件法満足度評価と3項目の自由記述である。印象に残ったことは、「ミールラウンドの手法、看取りでの食支援、正しい知識を持つこと」であった。ミールラウンドに関してさらに知りたいことは、「嚥下評価の仕方、ミールラウンドのより具体的な手法、食事の選定方法」であった。困っていることは「職員間で意見・見解が異なる、職員間の知識技術の差、歯科医院との協力関係の形成、摂食嚥下評価」であった。Web調査は全て選択回答形式とした。回答した13施設のうち、口腔衛生管理加算を算定していない施設が7件あった。ミールラウンドを実施している施設は9件で6件は2024年度以前より行っていた。ミールラウンド実施で困難なことは、「協力歯科医との連携」5件、「実施日時の調整などスケジュール管理」3件、「具体的な食事の選定方法」1件、「特に困難はない」が2件であった。実施していない施設3件のうち2件は実施に向け準備中である。実施が難しい理由は「職員内の意向統一ができていない、実施方法が分からない、医師または歯科医師の協力が得られていない、労力の割に算定点数が低い」であった。研修を参考に実施していることは、ミールラウンドの実施に関して5件、施設で取り組みやすい食事観察や効果的な口腔ケアに関して、協力歯科医との連携に関しては各3件、「口腔衛生管理加算」の算定、最期まで食べる食支援については各2件であった。

【考察】

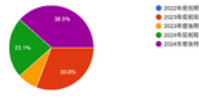
2022年度はCOVID-19感染流行期であり、参加者が少なかった。また、2日間研修で、口腔ケアと口腔衛生管理に関して多くの時間を充てた。終了後アンケートを参考に2023年度以降は1日研修とし、次年度の制度改正を念頭に置いて「ミールラウンド・食事マネジメント・口腔衛生管理加算」をキーワードに展開した。ミールラウンド取組のプロセス及び、咀嚼能力等の口腔機能を含む摂食嚥下について学習している。制度改正の2024年度は、同一施設から複数名申し込みが多く、最大で15名の参加を得た。後期は、管理栄養士が参加者の半数以上であった。この動向から、ミールラウンド・食事マネジメントへ関心が寄せられていると推察して、実施上課題となりやすいであろう歯科医を含む多職種連携とミールラウンドを中心に食支援を考えるものにシフトした。

しかし、ミールラウンドは感染対策及び、利用者の生活と個人情報保護へ配慮を要するため、事前事後会議で使用する資料は持ち帰れない等制約が多いうえ、座学が中心とならざるを得ない。そこで、食事場を離れたところから短時間観察し、その場を録画したものを後の講義で確認できるようにした。これにより、当日のスケジュールやスタッフの動き等一連の流れと必要な書類、準備すべきことや物を把握できたと99%が大変満足または満足と評価している。自施設での実施と受講時期に相関はなかったが、受講内容を参考に行っているとの回答を得た。さらに、ミールラウンドに関してさらに知りたいことをみると「嚥下評価の仕方、事例を交えたより具体的な手法、食事や補助食品の選定方法、ミールラウンド対象利用者の決め方、記録方法や書式について」等多岐にわたっていて、深化のための研修ニーズが示された。しかし、ミールラウンドは最期まで食べる支援の一部であるから、本研修ではこれに特化を予定していない。困っていることは「職員内の意向統一ができていない、医師または歯科医師の協力が得られていない」で両アンケートに共通していた。これらはミールラウンドを実施していない理由と一致し、不可欠な要素と考えられる。また、アンケートに依拠していないが、総数のうち5施設は複数回参加し、県外施設が5件あった。これは摂食嚥下への関心の高さが示されるものである。受講効果を高めるために、アンケートに記載の質問に対しQ&Aを作成して送付する等検討の余地がある。但し、困りごとにあった「歯科医師との連携方法」等、地域環境特性といった外部要因が影響するものは個別性が高く、慎重な対応を要する。

【結論】

本研修は受講者の関心が高いミールラウンドに関して、概観する場としての役割を果たしていた。

受領時期について
13件の回答



「認知症管理加算」の算定状況について
13件の回答



メールラウンドの実施状況について
13件の回答



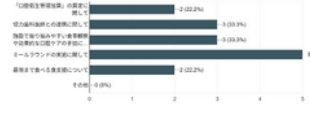
メールラウンド実施時期について
9件の回答



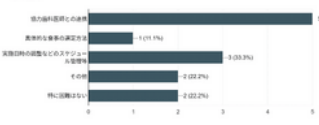
実地研修受講とメールラウンド開始の関係について
9件の回答



実地研修を修了して実施することについて ※複数回答可
9件の回答



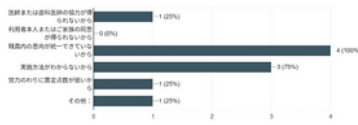
メールラウンドを実施していくうえで困難なことについて ※複数回答可
9件の回答



今後、メールラウンドを実施する予定について
4件の回答



メールラウンド実施が難しい理由について ※複数回答可
4件の回答



口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:40 ~ 13:48

[28-O-Z001-06] 当施設における多様な特性の方の施設運営業務参画

千葉県 ○治部 拓也, 深沢 彦史 (介護老人保健施設 市川ゆうゆう)

介護・福祉業界においては現在、少子高齢化に伴う深刻な人材不足への対応が急務となっており、多様な人材の活用が戦略的に進められている。その中でも、外国籍の方や障害をお持ちの方の雇用促進は、単なる労働力の補完にとどまらず、福祉サービスの質の向上や社会的包摂の推進といった広範な目的を有する。特に近年は、政府のダイバーシティ推進政策とも連動、企業や福祉施設における多様な雇用形態の模索が続いている。

2024年時点で、介護分野に従事する外国人労働者数は約4万人に達しており、今後も増加が見込まれている。障害者雇用に関しても、法定雇用率の引き上げが予定されており、2026年度には2.7%まで上昇する。これらの政策は、就労困難な方々への機会創出という社会的責務を担うものであり、同時に、誰もが働きやすい環境づくりと地域社会の多様性の実現を目的とした取り組みでもある。

しかしながら、実際には障害をお持ちの方の多くが「働きたいのに働けない」状況に置かれている現実もある。内閣府の調査によれば、15歳以上の障害者手帳保持者のうち、働いていないが就労意旨があると回答した人の割合は、身体障害者で約11.4%、知的障害者で約33.0%、精神障害者で約23.5%とされており、特に知的・精神障害を有する人々において高い傾向が見られる。これは、雇用の場が少ないことに加え、通勤支援の不足、職場環境の物理的・制度的バリア、同僚や管理者の理解不足など、複合的な要因が障壁となっていることを示唆している。

当施設では、すでに外国籍の方や障害をお持ちの方の雇用実績があり、多様な人材の受け入れを積極的に進めている。障害をお持ちの方の雇用については、当施設の目の前にある特別支援学校より職業体験実習等を以前より積極的に受け入れており、その一環である就職を見据えたインターンシップをこれまでに6名受け入れ、うち1名を介護助手として採用した。また、当該特別支援学校とは生徒の学習の一環として、生産した野菜やお菓子を施設の給食やおやつに利用したり、特別な技能を学んだ生徒の当施設降利用者との余暇での関わりなどカリキュラムの中で参画してもらっている。これに加え、身体に障害をお持ちのセラピスト (PT,OT,ST) や、あん摩マッサージ指圧師の雇用も進めており、さらなる人材の多様化を図っていく方針である。セラピストについては、リハビリ関連の加算算定により施設経営の安定化に資するとともに、利用者のQOLの向上に寄与することが期待される。一方、あん摩マッサージ指圧師については加算算定の対象とはならず、収入増には直結しないものの、疼痛の緩和、拘縮の予防、精神的安定の促進といった面で専門性を発揮し、利用者満足度の向上に貢献できると考えている。加えて当施設では、障害特性に応じた合理的配慮や、体調・生活状況に応じた柔軟な勤務体制の導入により、多様な人材が安心して長期的に活躍できる職場環境の整備を進めている。

外国籍の方の雇用については、2020年から現在にかけて、当施設では17名の外国籍の介護福祉士を採用している。これは、外国籍の職員のネットワークによるものや、実習を積極的に受け入れていることにより、現在は介護福祉士専門学生のアルバイトなど多岐にわたっている。また、セカンド、サードキャリアとして専門的な知識や技術を持ったシルバー人材を6名採用しており、その中には介護福祉士の資格を持ち、介護業務の一端を担う者や、元大工の経験を活かして施設内の設備修繕に対応するなど、多方面で活躍する職員もいる。

前述の採用者のうち、特別支援学校から当施設へ就職した一人の職員の事例を紹介する。

当施設の近隣には千葉県立特別支援学校市川大野高等学園（以下「大野学園」）という、「本物の働く力を育み、笑顔輝く生徒の育成」を教育理念に掲げ、卒業後の社会的・職業的自立を重視している学校がある。同校はインターンシップやデュアル実習制度を導入しており、専門科目の学習と並行して地域事業所での就労体験を通じ、働く意欲や社会性の育成を図っている。当該職員は大野学園の卒業生であり、在学中（2年次）に当施設で2回のインターンシップを実施した後、卒業と同時に介護助手として就職した。本人は当初より「将来は介護福祉士として働き、仕事でも私生活でも自立した生活を送れるようになりたい」という明確な目標を持っていた。就職初年度は、身体介護を除いた周辺業務を中心に従事していたが、年度途中で介護職員初任者研修を修了したことで、身体介助を含む介護業務にも携わるようになった。就職から2年以上が経過した現在は、介護福祉士実務者研修の受講を予定しており、より一層の自己研鑽に励んでいる。また、私生活においても、家族との同居生活から単身生活へ移行し、自らアパートを借りて自立した暮らしを送っている。

このように、当該職員がここまで自立を果たすことができたのは、本人の不断の努力はもちろんのこと、施設職員による継続的な支援、具体的には、コミュニケーション支援、業務内容や環境の調整、心のサポートや見守りなど、合理的配慮を意識した取り組みがあったからこそであると考えられる。

今回の事例を通じて、外国籍の方や障害をお持ちの方、シルバー人材など、多様な人材が施設運営業務に参画することで、多角的な視点からの意見交換が促進され、利用者のQOL向上に寄与することが期待される。加えて、介護職員数が制度開始以来初めて減少し、人材不足が深刻化している現代においては、人材確保の有効な手段であるとともに、多様性のある職場づくりや地域福祉の質の向上にもつながる重要な取り組みであるといえる。

今後も雇用の機会に恵まれない方のためにも、当施設はより一層多様な人材の自立支援に寄与していきたい。

口演 | その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 第14会場 (シーモール 5F ホール4)

[O-Z001] その他

座長：吉田 雅史 (介護老人保健施設老健ふなき)

13:48 ~ 13:56

[28-O-Z001-07] <腰は大事>

腰痛体操で予防改善

東京都 ○川上 典子 (介護老人保健施設花水木)

はじめに

当施設4階療養棟は、入所定員50名（平均介護度3.6）に対し、看護師3名・准看護師1名・介護福祉士14名・介護士1名の計19名（男7名・女12名）で構成されている。平均年齢は48.8歳、平均勤続年数は10年4カ月、他施設での介護経験も含めると介護歴は平均で16年1カ月である。長らく介護の仕事に従事する職員にとって、切っても切り離せないのが腰痛問題である。今までに腰痛を経験した職員は18名、現在も腰痛がある職員は13名。過去1年以内の業務中にぎっくり腰になった職員が2名いた。

腰痛の原因として、中腰や前屈みの作業が多い、毎日腰を使う環境であることなどが大きな理由である。日頃から腰痛に悩みその予防として自発的にストレッチや体操を行っている職員は6名いたが、腰痛を予防改善するには、ストレッチや体操が大事だと分かっているにもかかわらず、面倒くさい・方法がわからない等の理由で実践出来ていない職員が多くいた。

そこで本研究では、短時間でも手軽で効果的に、職場で職員全員が腰痛予防・再発防止に効果があったのか、その結果を報告する。

研究期間

令和7年1月1日～3月31日の3か月間

研究方法

4階職員19名を対象とする。

- (1)腰痛に関する事前アンケートを実施。腰痛の程度を把握する。
- (2)「これだけ体操」の動画を各自視聴し、手順を覚える。（手順はスライドを参照）
- (3)これだけ体操の実施。勤務中に3回実施する。実施時間は、日勤（8：30から17：00まで）は8：30・11：25・16：50。早番（7：30から16：00まで）は7：30・11：25・15：50。遅番（10：30から19：00まで）は10：30・15：50・18：50。夜勤（16：30から翌9：00まで）は16：50・23：00・8：30とする。
- (4)3カ月後に、実施後の腰痛アンケートの実施。
- (5)これだけ体操の実施前後で腰痛の状態の変化があったのか比較を行う。

結果

開始前から腰痛がある13名。腰痛予防・改善に興味がある19名。日頃から腰痛予防の為に体操等を行っている6名。業務中に腰痛にならない工夫をしている13名行っている工夫としては、コルセットの装着をしている人が一番多く、他介助中の姿勢に気を付ける・日頃から筋トレをしている・ベッドの高さを都度調整している等の回答があった。

ODIスコア(慢性腰痛患者の日常生活動作の障害の程度を把握する為の評価方法)を用いて職員の障害のレベルを算出する。体操を実施する前のスコア平均値14% (0%から100%までの範囲)

で高いほど腰痛になる障害が重い)。障害レベル、最小限の障害(0%から20%以内)14名。中等度の障害(21%から40%以内)5名。

3カ月間、これだけ体操を実施した後の結果、元々腰痛あり13名のうち、変化がなかった6名、軽減した7名。開始時に腰痛のなかった6名には顕著な変化はなかった。ODIスコア平均値13%に下がった。障害レベル最小限の障害15名、中等度の障害4名。腰痛に対する意識が高まった17名。具体的には、実際に「これだけ体操」を行ったことにより、腰痛体操の仕方が分かった・腰が楽になった・気持ち良かった等の理由から、空いている時間に職場以外でも腰痛体操を行うようになったとの回答が多かった。

考察・まとめ

3か月間と短い期間ではあったが、体操やストレッチを1か月以上続けると痛みを感じにくくなり、2か月続けると筋肉レベルで柔らかくなると言われている。そのため「これだけ体操」を継続して、腰痛が緩和する簡単で短時間で出来る体操が浸透した結果、全員が継続して3か月間実施出来たことにより、腰痛の軽減に一定の効果があったと考えられる。腰痛は筋力の低下だけではなく、柔軟性の低下も原因の一つとなる。緊張した筋肉をほぐして血行を促すことで腰回りの筋肉が柔らかくなると、可動域が広がり、腰椎への負担が軽減されると言われている。そのため、業務開始前と就業中に身体を動かして柔軟にすることで身体が楽になり、職員1人1人が継続することの大切さに気付き、日頃から自宅で体操を行うようになった職員が増えているのが、アンケート結果からも見て取れた。しかし、業務中に3回「これだけ体操」を実施するのは難しく、理由としては業務が多忙だった。1人で体操を実施する時間帯には忘れていた等が挙げられる。

今後は「これだけ体操」を確実に職員が出来る時間帯として、日勤、早番、遅番、夜勤それぞれ就業前と終了前の1日2回の実施に変更して、確実に実施が出来るようにすることで、今後も体操の習慣付ける取り組みを継続していく。

また、最近ではノーリフティングポリシーが浸透し始めており、腰痛対策としての働き方改革にも注目が集まっていることから、腰に負担がかからない福祉用具の導入なども検討していき、職員の大事な腰を守っていきたい。

文献(これだけ体操) 東大医学部特任教授松平浩医学博士考案
運動型健康増進施設の一覧(厚生労働省ホームページより)